

第3章 フリーハンドの総合学習

第1節 学級文化と集団づくり

この節の位置づけは、総合学習の総論部分にあたります。それを踏まえて、第2節以降にテーマ別の展開例を紹介していきます。

この節は、

- 「フリーハンド」の「総合学習」■
 - 学級文化をどう育てるか■
 - 「しばてん」文学の授業、劇化、そして版画集■
- の3つの項から成っています。

■「フリーハンド」の「総合学習」■

●「フリーハンド」ということ

私は、教科書のない(あるいは、教科書を使わない)授業が好きです。それは、フリーハンドの授業ができるからです。

「フリーハンドの授業」とは、教師の思いや願い、子どもの実態を出発点として教材や活動を組み立てられる授業という意味です。「総合的な学習の時間」の場合、多くの学校では、「平和」とか「環境」「福祉」というように扱うテーマが決められています。しかし、例えば「平和」をテーマにしたとしても、その具体的活動内容はフリーのはずです。私は、4月いっぱいぐらいをかけて、子どもと話し合いながら活動の大枠を組み立てていきます。前年度の計画をコピーして使うことも、自身のプログラムを再利用することはありません。

2002年 3年 (地域)校区の商業大作戦

2003年 5年 (環境)バケツ稲から広がる世界

2004年 6年 (人権)人として～私たちの汚染一揆～

2005年 6年 (人権)きらきら～いのちかがやいて～

2006年	3年	(地域)われら校区探検隊
2007年	6年	(平和)ぴいす めっせえじ(ピースメッセージ)
2008年	6年	(環境)G I F T～ケナフを育てる～
2009年	5年	(学力)
2010年	5年	(地域)地域遺産はやま
2011年	6年	(平和)戦争と吐山
2012年	4年	(環境)川の旅
2013年	3年	(地域)吐山を歩こう

●「総合学習」ということ

「総合学習」と「総合的な学習の時間」は同義語ではありません。「総合的な学習の時間」は、2002年度から教育課程に位置づけられた、つまり時間割に指導のコマが保証された活動のことです。

「総合学習」は、それより以前からありました。呼び名はともかく、私の知見では1980年代には長野県の伊那谷小学校や東京の和光小学校で取り組みが公開されていました。その後、90年代に入って、大阪の同和教育が「人権総合学習」の取り組みを発信するようになりました。これには私も足繁く通い、その時の学びが私の「総合的な学習の時間」のベースになっています。

「総合学習」は教育課程に位置づけられたものではありません。したがって、時間割にコマがありません。どうしていたかと言うと、合科学習です。生活科や総合的な学習の時間でも合科指導をしています。基本になるコマの保証がない点で大きく異なります。

このあと紹介します「しばてん」は、1989年の取り組みです。読みは国語の授業で行い、劇は学活や道徳の時間に、版画集作成は図工の時間に行いました。それぞれの教科・領域で取り組みつつ、トータルとして1つにまとまっているというわけです。

私は、こうした長いスパンで取り組む活動は、子どもを育て集団を育てる上でとても大事だと考えています。しかし、「総合的な学習の時間」は最早風前の灯です。「学力」に大きく舵を切った文科省には、2002年を迎えた頃の熱はありません。学校現場は、もともと「総合」の導入を歓迎してはいませんでした。「教科書がないと教えられない」「準備が大変だ」等々、反対の理由は数多ありました。

私が「総合学習」ということを言っているのは、時間割から総合の時間が消えたとしても、この活動を大事に育てていく術を伝えたいと願うからです。

■学級文化をどう育てるか■

この文章は、2009年3月にまとめた2008年度6年生の記録です。

1. 学級文化とは何か

(1)はじめに

学級文化と私が呼んでいるものの正体は、その教室に流れている空気のことである。あるいはまた、空気の結晶としての文化活動や芸術のことである。

教室に流れている空気というのは、共有化された価値観と言い換えることもできる。つまり、何に興味・関心を持ち、何を善しとし、何に情熱を注ぐかというクラスの子どもたちの有り様の問題である。

こうした空気・価値観というのは、集団に自然醸成されるものではない。いやむしろ、自主性の名の下に子ども任せにされた集団は、子どもの中に層を作り、学級文化を阻害する土壌を作りがちだ。私は、そうしたクラスをいくつも見てきた。学級文化は、教師が種を蒔き、子どもたちを耕し鍛えることで実を結ぶものだ。子どもの自主性は、そのフィールドの中で発揮されるものだと考えている。

(2)なぜ学級文化なのか

単学級でクラス替えのない学年が、その年度によって全く異なる表情を見せることがよくある。子どもの発達段階ということもあるが、実のところその時々担任教師の影響が大きい。教師が意識しているか否かに拘わらず、子どもたちは教師の発するメッセージに反応して生きている。1日の大半を担任教師と過ごす小学校において、子どもたちの姿は、良くも悪くも鏡に映った担任教師の姿であると言っていい。

どんな学級文化を育てるかということは、どんな学級集団を作るのかということと同義である。担任教師は、例外なくまとまりのあるクラスを作りたいと考えている。問題は、子どもたちを繋ぎ束ねる「ボンド」だ。その「ボンド」こそが「学級文化」なのである。つまり学級文化は、めざす学級集団に近付くための手段であり表現方法であると言える。

2. 学級文化をどう育てるか

(1)プロローグ

この小稿は、2007年度6年生(以下、学級通信のタイトルより「心の如く」

の子ら”と呼ぶ)と2008年度6年生(以下、同様に“「NOBI」の子ら”と呼ぶ)の記録としてまとめるものである。

(2)教室を学びの場に

あまりにも当然のことながら、教室は学びの場でなければならない。知的好奇心が掻き立てられる場でなければならない。そういう空気が漂っている教室でありたい。

この2年間で、45分の授業を支える空気作りがカタチを成しつつある。

きっかけは、子どもたちに確かな読みの力を付けるという研究主題にあった。国語科を中心にした主題であるが、可視化された具体的到達点の1つとして、私は算数科の文章題を苦にせず立式できることを掲げた。読みの力は正しいスキルをツールとして操れるようになれば、誰もが一定程度のレベルに達する。文章題に即して言えば、分かることと分からないことにアンダーラインを付し、それを線図に表現する。加える線図、引く線図・違いの線図、1あたり量の線図を文章表現から描き分けられるようになれば、100%立式できる。

K塾プリントと名付けた文章題1問のプリントを、月から木曜日、毎日宿題にした。加えて金曜日には、KSP塾プリントという思考力を育てる宿題を出した。2008年には、K塾おもしろ算数教室というややレベルの高いプリントも登場した。

朝、登校してきた子どもたちは、教卓にプリントを出す。始業前の教室でマルを付け、朝の会の時間には返す。子どもたちがプリントの意図を理解し、線図をツールとして操作できるようになってくると、教室の空気が変わる。朝の教室で文章題が話題になっていることもあれば、求め方を聞いて納得顔の子もいる。実際ほぼ全ての子ができるようになったのだが、それ以上に空気の変化の効果が大きかったと感じている。

2008年度の2学期、山陽小野市の実践をモデルに「朝モジュール」を採り入れてみた。火・水・木曜日の1時間目の冒頭、音読、100マス計算、漢字プリントをしている。音読には、『枕草子』や『平家物語』などの古典や、「春望」「春暁」などの漢詩を使った。繰り返しているうちに、声を揃えて素読できるようになる。朝の教室に響く朗々とした声は実にいい。100マス計算では、モニタ画面いっぱい映るストップウォッチを用意し、瞬時にタイムを確認できるようにした。静寂の中に鉛筆の音だけが聞こえる。漢字プリントは、前日に問題を予告することで家庭学習の定着を図った。脳を目覚めさせ学習のスイッチを入れる、集中力を高め学習に向かう準備をさせることがねらいであるが、先行事例のような学力向上があったかどうかは検証できていない。ただ、1時間目への入りがよくなったような感じはしている。

何にしろ、与えられた課題に一生懸命取り組んでくれる子どもたちに育てられて、今ここに立っている。

(3) 学級集団の課題を掴む

「心の如く」という通信のタイトルは、「怒」という字を分解したもので、「怒」は「おもいやり」という意味である。このクラスにはひどく疎外されている女の子が一人いた。担任が決まった時、この子を学級づくりの核にしようと考えて、通信のタイトルを「心の如く」とした。(この子は家庭の事情で5月末に転居した)

「NOBI」は、「のび」(一人ひとりがのびのび育てほしい)・「伸び」(友だちと協力し励まし合って、クラス全体が伸びてほしい)・「野火」(野火のごとく、こつこつと努力を惜しまず、ねばり強く課題を追究する教室にしたい)・「野比」(決して人をいじめない、友だちに対する優しさと思いやりという野比のび太の強さをもってほしい)という学級づくりの4つの柱を託したメッセージである。

学級開きの日に通信の第1号を配り、しばらく後にそれに込めた思いを語る。あわせて、子どもたちが感じているクラスの良さと問題点を集約し、学級の課題を練り上げていく。「心の如く」の子らの場合、「なかまの思いに心を寄せられる人になろう」「一所懸命に頑張れる人になろう」(一生でなく一所としているのは、その日その場所ですべきことを懸命にするという意味から)の2つが学級目標になった。

(4) 種を蒔く

総合的な学習の時間の展開と学級文化の問題は、深く関わっている。5月のヒロシマ修学旅行を終える頃、1年間の総合学習の流れが決まってくる。種を蒔き、仕掛けを作る。

「心の如く」の子らの時は、修学旅行のまとめがその時期になる。ヒロシマで聞いた被爆体験が子どもたちの心に深く残ったことが、作文から読み取れた。12月に「平和のとりでを築く」で研究授業を行う予定もあり、「平和」でいこうという漠然とした構想ができた。運良く、8月の初め、ヒロシマで体験談を語ってくれた森本さんが奈良に来られ、講演をされる機会があった。私はその講演を録音し、テープ起こしをして9月を迎えた。

「NOBI」の子らの年は、洞爺湖サミットで環境問題がクローズアップされていた。「環境」をテーマにしようかという漠とした思いはあったが、4月段階では未だ霧状態のまま、取り敢えずケナフの種子を買い、資料を集めた。5月末に種を蒔いたが、これもまだ時期を逃さないための作業であり、それ以上の構想があったわけではない。その後、子どもは定植と除草をしたが、水やりは教師の

仕事になった。そして、成長記録の写真だけは絶やさずに残した。

種を蒔き、仕掛けを作る段階というのは、いつもこんな感じだ。ただ、自分なりの譲れない決まり事はある。1つは学級の課題に迫れるかということ、もう1つは人権教育として展開できるかということだ。見極めを急がず、いつでも捨てる覚悟を持ちつつ、展開のための準備だけはしておくのである。

(5)文化の芽を育てる

1学期の子どもたちの活動を見ながら、私は、フィナーレを思い描く。どんな内容で、どんな方法で勝負すれば、学級文化の花を咲かせ結実させることができるだろうか。この悩み苦しきは、例年、夏休み明けまで続く。

「心の如く」の子らの場合、2学期の始業式の日から5回、学級通信で講演録を紹介した。そして、その最終号を「森本さんは、1928年7月2日生まれです。17才で被爆しました。そして戦後62年の今夏、79才になりました。森本さんは生き残った者の『責任』として、ヒロシマを語り続けておられます。お元気な方ではありますが、講演活動がいつまでも続くわけではありません。お話を聞きながら、聞いた者の『責任』ということを考えました。そのことを一緒に考えたくて、修学旅行でお話を聞いたみなさんに再度紹介したというわけです。」と結んだ。子どもに球を投げた瞬間である。

子どもたちの目は、投げられた玉を受け止めた。森本さんの体験談を多くの人に知ってもらおうということでも話はまとまった。問題は表現方法である。劇や映画にしようという意見が出る一方で、それは無理だという意見も出る。予定調和の話し合いはいやらしい限りだが、ビデオ紙芝居という方法もあることを伝えると、それで一件落着となった。講演録をもとにシナリオを作り、シナリオに合わせて絵のカットを決め、配役を決める頃には、子どもたちはすっかり森本さんモードになっている。

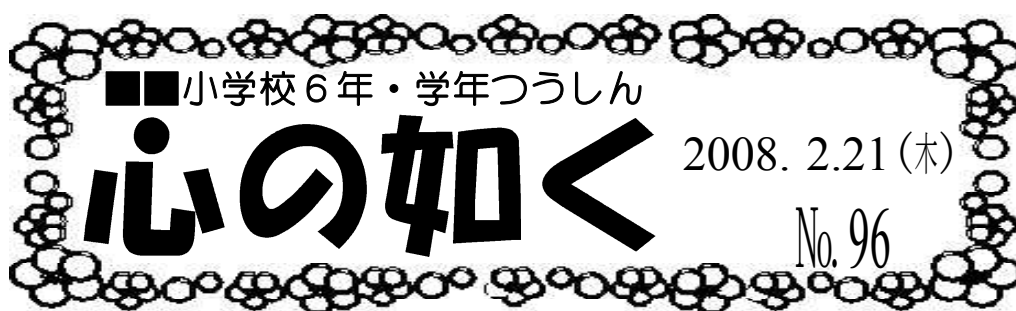
「NOBI」の子らの場合は、2学期の始業式の日、学級園でケナフの観察をして、「発見」したことをカードに書かせた。葉の形の違いに気付かせたかったのである。そして、これを機に課題を設定しての調べ学習に入った。「ケナフって?」「葉の形が違うのは?」「地球温暖化にマル」「森林破壊にマル」「食糧不足にマル」「ケナフを食べよう」「ケナフで紙を作ろう」の7グループに分かれて調べ、まとめた。その中で、ちょっとしたケナフ博士が何人も誕生していった。

(6)花を咲かせ、結実させる

勝負を懸けた学級文化は、絶対に成功させなければならない。子どもたちが、自分たちの咲かせた花・結ばせた実感動するものに仕上げなければならない。そうでなければ、しない方がいい。まさに、勝負なのだ。

「花」や「実」の見せ方はさまざまであっていい。子どもが、ついでに保護者も、「花」や「実」を実感できればそれでいい。舞台発表をしたこともある。映画制作をしたこともある。そして今回は、紙芝居や発表をDVDにまとめていくという手法をとった。ここ数年、映像処理を多用しているのは、自分の特技とコンピュータの性能向上に依るもので、これを薦めるつもりは毛頭ない。自分が勝負できるフィールドで仕掛けることだ。

「心の如く」の子らの「花」と「実」については、DVD上映会となった最後の参観日に発行した保護者向け通信を引きたい。



おうちの方へ特集号

「ぴいす めっせえじ」上映会へようこそ!!

日曜日に『母べえ』という映画を見ました。太平洋戦争前夜から戦中戦後を描いた作品です。吉永小百合さん演ずる母べえ(べえは、それぞれの呼び名の後に夫が付けたちょっとしたユーモア)を中心に展開する、ありふれた市井の生活が映されています。父べえは危険思想の持ち主という嫌疑で逮捕され、やがて獄死します。残された母子を支えた父べえの妹は、郷里の広島で原爆に遭い死にます。もう1人の支えであった父べえの教え子は、南方で戦死します。母べえは必死で2人の娘を育て上げ、年老いて死期を迎えます。最期のときの病床で、娘が「天国で父べえに会えるね。」と言います。母べえは聞き取れぬ声でこう答えました。

「天国でなんか会いたくない。生きている父べえに会いたい。」と。一声高に戦争反対を訴える作品ではありません。しかし、最後の場面でのこの一言に山田洋次監督の「ピース・メッセージ」が込められているように思います。映画を見終わった観客は、誰一人として一言もしゃべらず会場を去っていきました。

長々と映画評論家みたいなことを書いてしまいました。山田監督は、この映画の企画発表で、「嵐が唸り声をあげて吹きすさぶようなつらい時代を、家族をひしと抱きかかえて生き抜いた優しいお母さんたちへの、あの時代を知っている世代のぼくからのオマージュ(賛辞)としてこの作品を作りたい」と話しておられました。

山田監督は、あの時代を知っている世代の人間として「ピース・メッセージ」を作品にされました。それに対して、今日ご覧いただくDVD「ぴいす めっせえじ」は、あの時代を知らない世代の人間が今自分たちにできることをかたちに

したものです。

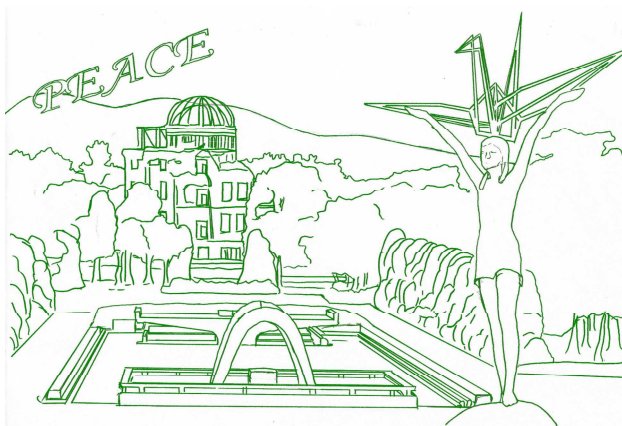
2学期後半に、「平和のとりでを築く」という国語教材を学習しました。原爆ドームをテーマにした教材文を読み取った後、調べたことをもとに平和について自分の意見を書くという内容です。学習の中で、何人もの子どもが、「私たちは過去の事実を知らなければならない」「知ったことを次の世代に伝えなければならない」と書いていました。

DVDは、子どもたちの思いの具体的なかたちです。DVDの第1部は修学旅行で体験談を聞いた森本さんの紙芝居、第2部は平和についての意見文の要約です。時間的順序から言うと、この学習より先に、10月から紙芝居作りが始まっていました。子どもの学びを予見していたわけではありませんが、そこは長年のカンということであ…。

紙芝居は、グループに分かれて40枚ほどの絵を描きました。そして、配役を決めてセリフやナレーションを録音しました。子どもたちにとって、描くことや演じることが被爆体験の追体験になりました。修学旅行で聞いた時とは一步深いところでの出会い直しにもなりました。そして、知った事実をこうした形で伝え広めることの大切さを体感してくれたと思います。

子どもたちが生出演している第2部は、時間の制約で短いものになっています。ぜひとも、2学期末に発行しています「わたし発、ピースメッセージ」の原文をお読みいただきたいと思います。子どもたちの学びが驚くほどに高度なのです。一人ひとりの子どもがテーマを決め、本やインターネットで資料を集めました。そして、資料を効果的に使って一決して資料の丸写しをしていないのがスゴイ！一、自分なりの論理を展開しています。

DVD『ぴいす めっせえじ』は、第1部「ヒロシマからのメッセージ」と第2部「わたし発、ピースメッセージ」で終わっていますが、実は第3部があるのです。青空広場で制作中の壁画「PEACE」がそれです。自分たちが訪れたヒロシマを描くこと、そしてそれを多くの人に見てもらおうことが、子どもたちのピースメッセージなのです。テーマに沿って、描写からマンガっぽさを排したことへの賛否は分かれると思います。そこは趣旨をくんでいただき、お帰りの際に第3部として見ていただきたいと思っています。



絵を描き、セリフやナレーションを演じることが、子どもの学びを深めるとともに確かなものになっている。ここに取り組みのカギがある。紙芝居には効果音やBGMが入っていて、それなりに迫力がある。子どもと保護者の反応を1つずつ紹介したい。

■ 今日、小学校生活最後の参観があった。今日は総合で「ぴいす・めっせえじ」を見た。「ヒロシマからのメッセージ」は、見るのが初めてだったから、少し緊張した。でも、どんな感じに仕上がっているか気になっていた。私が思っていたよりも、いい作品になっていたと思う。がんばって絵をかいたりしてよかったと思った。「わたし発、ピースメッセージ」は、一回見たから大体分かっていた。なんか、あっと言う間に終わってしまった。「ぴいす・めっせえじ」がいい作品にできていて、とてもよかった。小学校生活最後の参観は、楽しかったけど緊張した。



■ DVD『ぴいす・めっせえじ』を見て、とても驚きました。それは、セリフやナレーション、そして絵までもがみんなで作ったものだったからです。特に紙芝居の絵は、すごく上手に描かれていて、ところどころの場面では思わず目を覆いたくなるほどのリアルさでした。第2部の「わたし発、ピースメッセージ」は、一人ひとりがよく調べて、自分の考えを持っていることに感心しました。自分の6年生のころを一生懸命思い出してみても、そんな世界の平和なんて考えていなかったな…。ほんと、みんなはすごいなと思いました。そして、青空広場の壁画。「すごい!!うまい!!」ただ、ただ感動しました。今でも目を閉じると、はっきりと浮かんできます。そして、寒い中頑張ったみんなは本当にすごいと思います。いつかその壁画が消えてしまうと思うと、残念でたまりません。これまで、

すごいとしか表現できない自分が恥ずかしいですが、いいものを見させていただきました。6年生のみんな、□□先生、本当にありがとうございました。

「NOBI」の子らの「花」と「実」についても、同様に参観日に発行した保護者向け通信を引きたい。



おうちの方へ特集号

ようこそ、最後の授業参観へ

早いものですね。卒業式までちょうど1ヶ月になりました。

明日は、小学校生活最後の参観日です。この1年間の集大成、子どもたちのすべてを公開します。授業の開始からお帰りの間際まで、たっぷりご覧いただきたいと思います。

授業開始のチャイムとともに、「朝モジュール」の一部を見ていただきます。『枕草子』『平家物語』『春望』の素読をします。古典や漢詩を朗々と読み合う光景は、圧巻ですよ。(3分程で終わります)

K塾シリーズ・朝モジュールと、この1年で子どもたちを鍛える形が出来上がってきました。ぼくは教えることを生業としているのですが、教師は子どもに育てられると実感しています。31年にもなる“老兵”をなお前に進ませってくれる子らに感謝して、その1コマをご覧いただくという算段です。

今回のメインは、DVD「G I F T」の上映です。(37分23秒)

オープニングは、5月末の種まきから10月末の刈り取りまでのケナフ栽培記録です。バックにはテーマ曲「G I F T」(ミスチル)が流れます。

2部構成からなる作品の第1部は、ケナフについて調べたことの発表会です。「ケナフって?」「葉の形が違うのは?」「地球温暖化にマル」「森林破壊にマル」「食糧不足にマル」「ケナフを食べよう」「ケナフで紙を作ろう」の7グループに分かれて発表しています。資料選びやまとめ方に工夫のあとが見られます。表形式の資料を見やすいエクセルグラフに作り替える子もいて、さすが6年生と思わせる内容になっています。

第2部は、ケナフパルプで紙すきをして作ったハガキの作品集です。ケナフハガキに薄墨で字をしたため、その字にまつわるスピーチをしています。書いた文

字の内容と姿形に個性があって、それぞれの子の今を映し出しているようです。中には書く文字に窮して、苦し紛れに苗字を書き、スピーチで難儀した子もいましたが、それもまたご愛敬ということで…。

「G I F T」というタイトルについて触れておきましょう。これには2つの意味を込めています。1つは、ケナフが地球環境を考えるきっかけを与えてくれる「贈り物」だということです。もう1つは、そこにこそぼくの真意があるのですが、ケナフを題材に取り組むことで仲間と繋がり、一人ひとりを成長させてくれる「贈り物」になってほしいという願いです。草尾が担任になれば映画作りと期待していた子どもたちにとって、ケナフがどれほどの「贈り物」になり得たか心許ないのですが、思いの深さは映画に勝るということでご容赦いただきたいと思います。

最後に、お帰りの際にあおぞら広場で見ていただきたいのが、壁画「F r i e n d」です。「Friend」は一般的には「友だち」ですが、ここでは「仲間」と訳します。5月30日を最後にアメリカへ引っ越したNくんと一緒に、■■小学校を卒業したいという子どもたちの思いを絵に表しました。グーグルアースでお馴染みの地図をもとに、日米間の距離を縮めてベース図にしました。奈良の大仏と自由の女神はそれぞれのシンボルとして図案化しています。そして、日本の上空にはハナミズキを、アメリカの上空にはソメイヨシノを咲かせました。これは、お互いに苗木を贈り合った100年近く前の友好史に由来しています。26人の子どもたちは、アメリカ大陸を目指してさまざまな手段で太平洋を渡っています。一方、アメリカ大陸ではNくんたちがカリフォルニア辺りを目指して走っています。28人は、卒業の日も、そして卒業の後も■■小の「仲間」です。



参観日の後、保護者からメッセージをいただいた。届いたと感じられれば、作り上げるまでの労など些末なことだ。

■ DVDを見せていただき、子ども一人一人が成長し、いよいよ中学校入学だという実感がわいてきました。

保育園から一緒だという子も多く、小さかった頃の顔を思い浮かべ、見ていました。このクラスの子は、男の子・女の子の仲が良く、楽しくまとまりのあるクラスだと思います。

ケナフの発表も、何度も撮り直したけれど楽しかったと、子どもも話してくれました。家でも育てていましたが、家族の者も勉強になりました。一つのことをみんなで調べていくことで、みんなの気持ちも一つになれたと思います。

また、好きな言葉をケナフハガキに書いたということも、子ども一人一人の宝

物になったように思います。すごくうれしそうな顔をして持って帰ってきました。

DVDでは、なるほどと感心させられました。大人も子どもに負けてはいけないなと思いました。すてきなプレゼント、ありがとうございました。

余録になるが、通信に出てきた壁画の写真と、卒業式のおよびかけの一部を紹介しておこう。これもまた、間違いなくなかまを繋ぐ「ボンド」であった。



- (60) 地球環境と人への優しさを学んだ
- (61) ケナフ栽培、ハガキ作り
- (62) 手漉きの紙に書いた文字は
- (63) 自然がくれた
- (64) 12歳の私への贈り物です
- (65) 寒空の下、筆を走らせた
- (66) 壁画「Friend」
- (67) アメリカにいる友を思う
- (68) みんなの思いが重なり合いました
- (69) 28人の心が一つになった
- (70) 私たちの宝物です
- (71) 小学校生活で学んだ数々のことをもとに
- (72) それぞれの夢に向かって

- (73) 中学校へ行っても努力することを誓います
- (74) 100年の昔
- (75) 東京のサクラがアメリカに贈られ
- (76) ニューヨークのハナミズキが日本に届きました
- (77) 友情の架け橋の向こうに
- (78) ぼくたちの仲間がいます
- (79) 離れていても仲間は仲間
- (80) 私たちは
- (81) 静かに友情を温め合う
- (82) 絆の強さを知りました
- (83) たくさんの思い出と
- (84) 多くの方々への感謝を胸に
- (85) 今
- (86) ぼくたち
- (87) 私たちは
- (88) 旅立とうとしています

(歌 一青窈「ハナミズキ」)

- (89) 今まで本当にありがとうございました
- (90) ありがとうございました
- (91) そして
- (92) さようなら
- (93) さようなら

(7) エピローグ

学級文化には、子どもを引っ張る文化と子どもの背中を押す文化がある。

自分が勝負どころと決めたものについては、ためらいなく引っ張る。引っ張るけれども押しつけない。選択の幅と、各選択肢における遊びや自由度は必ず確保する。子どもの「主体性」を演出するためである。ここまで書いてきたことは、総じてこの範疇に属する。

一方、子どもに100%任せてしまうこともある。子どもに支援を求められたら手を貸すが、それまでは危うく見えても見守る。タイムリミットだと判断した時に限り、軌道修正の指示を出すこともある。子どもの背中を押すというのは、そういうことを指している。「心の如く」の子らが集会発表でした「シンデレラ」

の劇や、「NOBI」の子らが6年生を送る会でした6年間の思い出の劇などがそう。こうした時は、内容的な価値には期待しないことにしている。自分たちでやったという成就感や達成感、一体感を得られればそれでいい。引っ張る文化と背中を押す文化の兼ね合いは教師次第だが、経験則として、子どもは鍛えられる中で学び、主体的に活動するためのスキルを獲得していくとは言える。

■ 私は、このクラスの一員になれてよかった。いつも笑ってられるし、楽しく勉強ができるから。なんかいやなことがあっても、友達がはげましてくれたり、笑わせてくれたりするから、くじけずに卒業まで学校に来れたと思う。私は、学校に勉強しに来てるのもあるけど、友達と会っておしゃべりしに来てるのもあるし、学校の授業がおもしろくて来てるのもある。まあ、全部含めて、学校は楽しい。だから6年間、学校が楽しいと思えてきて、学校まで毎日歩いてこれたと思う。今まで、転校していった人や、転入してきた人もいっぱいいた。いろんな人が入って来たり、出て行ったりした。別れを言わず転校していった人もいた。今どうしてるかなあ、とたびたび考える。そんな人達も含め、同じクラスになってくれて、ありがとう。

先ごろ卒業していった子どもが、卒業前に書き残した一文である。前年度の卒業生も含め、「このクラスでよかった」「みんな、ありがとう」という文言をいくつもいくつも目にした。「同じクラスになってくれて、ありがとう」などとぼくは綴ったことがないし、そんな思いを持った記憶もない。こんなきらきらとした子どもたちと一緒に時間と空間を過ごせたことが、幸せでならない。人権教育としての深まりは十分とは言えない。だが、「ボンド」の役目は果たせたかなと胸を撫で下ろし、ふと上げた目線の先に、春の空と桜の蕾の膨らみが映った。

■「しばてん」 文学の授業、劇化、そして版画集■

これは、1988年度5年生のクラスにおける実践記録です。同和教育を「総合学習」として展開していく1例になるかと思います。1989年3月の文章で、奈良県同和教育研究会の実践記録集所収。

I. 「しばてん」 読みの授業

1. この子らに「しばてん」を

お父さんとお母さんは、りこんするとけついた。子どもはお母さんがひきとって、ぜったいお父さんにあわせないという。はじめは、お父さん

は、ひっこしして家は小さくなるかわからないけど、1年に2回はりょこうにつれて行って、1か月に2回は食べにつれて行ってやるといった。でもお父さんが、「二人とも2階にいていなさい」といって、子どもがいないあいだおおげんか。そして、りこん。これからさきは、お母さんが、「自分でこの家はらっていけないので売る。」といって、ひっこしすることになった。先生、みじかい間だったけどおもしろかった。ひっこしはいつかわからない。もう、めちゃくちゃ。死ぬほどいややわ。もう一度、二人たちなおってほしい。

転勤してきたばかりのぼくとの出会いから1か月あまり。「お父さんのしゃっ金」という一文に続いて出されてきた日記を前にして、ぼくは絶句した。出会ったばかりのぼくに打ち明けるには、あまりにも重い事実。なぜ、ぼくのようなものと思うと同時に、ぼくのようなものにでも打ち明けずにはおれないほど、彼女は苦しんでいるのだと思った。

ぼくの父はお酒がすきで、それもちょっとすぎると酒にまけてしまう人でした。今もそうなんだけど。酒によくと、母をいびったり、その辺にあるものを投げつけたりしました。ぼくは何も言うことができず、息をひそめながら、両親のやりとりを聞いていたものです。茶わんのわれる音やどなり声に、何度むねのつぶれる思いをしたかしれません。きみの日記を読んでいて、ぼくの小さかったころのことを思い返していました。今のぼくには何をすることもできません。わずか10才のきみが、32才のぼくよりも重い荷物を持ちながら、それでもけなげに生きていることをしっかりと受けとめたいと思います。

赤ペンをとりはしたものの、その時のぼくにはそれだけしか書けなかった。彼女は、日記のおしまい、「みんなにはわたしがいいってゆうまでゆわないでね」と書いていた。それは、知られたくないことだけど、本当は自分のことを知ってほしいという思いのあらわれである。彼女が安心して自分の心の内を語れる集団を育てること、それが、ぼくに“すぎる”しかなかった彼女に対して、ぼくがしなければならぬことだと思った。

幸いにして、“離婚”の件は数日後の「世界一うれしいこと」という日記によって、表面的には解決した。しかし、集団づくりの課題はこの件で一層明確になったように思う。一見これといった問題のない学級であったが、その平静さは、他人のことに無関心に生きることによって生まれる類のものに見えてきた。加えて、そこからくる自治能力の低さが、過度に教師に依存した集団の体質を醸していた。そこには隠然たる力の関係があって、その頂点に位置し、あるいは位置させられていた和也君や郁代さんという被差別部落出身児童への慢性的な服従と不満として燻っていた。当然にも、和也君や郁代さんにも集団への不信と不満があ

った。

“なかまとかかわって生きる”ということはなかなか難しい。日記指導とそれを一枚文集で集団に返すことに重点を置いてはいたが、一朝一夕に進むものではない。この子らの心に届くものを、集団を耕し育ててくれる教材をと考えて選んだのが「しばてん」だった。

2. 「しばてん」をこう読む

「しばてん」は、作者・田島征三氏の育った土佐で、今でも人々に親しまれている妖怪「しばてん」をモチーフにして、作者が子どもの頃に起こった学級での出来事を思い浮かべながら書かれた作品である。作品は、多くの人間の内に潜む弱い立場にある者を差別しながらしか生きていけない人間のかなしさを問おうとするものである。

村人の位置に視点を置きながら読みを進めたい。村人の視点とは学級集団の大多数の視点であり、そこから太郎を、或いはまた長者・役人を見据えていきたい。そうした視点で作品を見た時ポイントの第1は、太郎をえぼし山に追い上げるに至る村人の行為にある。第2は、長者の米倉の打ち壊しに至る村人にある。第3は、太郎を役人に売り渡す村人にある。第1については、貧しい生活の中で米を出し合って太郎を育てるやさしさを持つ村人たちでありながら、一旦「しばてんの生まれ変わりではないか」と疑いをもち始めると、長者の一声で太郎をえぼし山に追い上げてしまっている。ここに大衆心理や大衆の持つ弱さといったものを見ることができる。これは学級集団がしばしば見せる姿でもある。この村人の位置に立ちながら、村人によって追い上げられた太郎の気持ちを考えたい。さらには、長者の意図を考えたい。第2については、まず村人にとって長者の存在は何だったのかと言うことが問題になる。権力者としての冷酷さ、ずるさが、村人の打ち壊しを生んでいくのである。この作品を扱ううえで、身分制度のことがよく問題にされている。確かに時代背景をある程度つかませることは必要である。しかし、士と農工商という身分制度を理解しないと読めないということではない。本来、力を併せなくてはならない農民の中にあって、長者が「権力者」として村人を支配し、村人はより社会的弱者である太郎を裏切っていく。そこに権力の支配構造を読み取ることのほうが、問題を一層明確にするのではないかと思う。さて、打ち壊しは、村人にとってまさに生死の瀬戸際での選択であった。それは、子どもたちの中にある「盗みは悪いこと」という「公式」では割り切れないものである。この場面は、米「騒動」の思想に通じるものとして読みたい。第3については、「しばてん」という「非人間的なもの」に転嫁することによって自分の罪の意識を合理化していく村人の姿が問題になる。ここには部落問題に通じる差別の意識構造がある。そして、それはまた学級集団にあって子どもたちがしばし

ば見せる姿でもある。道徳的な善悪の問題ではなく、自分たちのクラスの問題と繋げて読ませたい。一方、村人によって役人に売り渡された太郎の問題である。涙一粒流さず、真実を語ることもしなかった太郎であるが、この場面の太郎の挿絵は、あとがき「しばてんとぼく」にある「あの子のからだの中は、いつも、なみだでいっぱいだった」と符合する。ここは深く読み取りたい。太郎は、村人の中に同じ被抑圧者としての悲しみを見、村人の行為を許したのだろうか。それもあるように思うし、それ以上に、結局は繋がり切れなかった村人に対する諦めがあったのではないかと思う。何れにしても悲しい選択である。切羽詰まった村人の行為は理解できるが、それが太郎にどれほど悲しい選択をさせたかという結果は、改めて問われなければならない。そこから、村人を差別的行為に追いやった権力の仕組みが見えてくる。

当時の時代背景を度外視しても、何が問題の解決になるのかを考えることは、子どもの力からして困難に思う。しかし、なかまと関わって生きる、なかまと繋がって生きるということのできにくいクラスの実態であるからこそ、この作品と深く深く出会わせたい。

3. 一読総合読みで

「しばてん」の授業は、一読総合読みでじっくりと取り組むことにした。このクラスの子どもたちにとっては初めての一読総合法の授業である。

一読総合法について若干触れておきたい。

従来からの「読解指導」「読み方指導」のねらいは、作者の意図を読み取ることや、作品の主題を読み取ることにあつた。その目的のために、「通読→精読→味読」あるいは、「文意の想定→文意にしたがった各段階、各部分の読み→文意の確認」という三読法が行われてきた。ここでは個々の子どもたちの豊かな想像力や感性は不要であつて、己を空しくして読むことを要求された。これに対して「文学教育」をめざす人たちは、読者を読む、つまり読者の主体的な意味付けを重視してきた。もちろん、そうしたことを通して作品の主題を読み取る力も養われていくのであるが。一読総合法もこの立場に立っている。

一読総合法が通読を否定しているのは、第一読精読こそが読みの本来の姿であるからに他ならない。つまり、言葉と向き合いながら想像力や感性を精一杯に働かせながら、時には話の展開を予想しつつ読み進めるところに、読むことの楽しさがある。私たちの目の前にいる子どもは、文学の好きな子どもばかりではない。そのままにしておけば、文学の楽しさもおもしろさも知らずに卒業してしまう子どもも、決して少数ではない。そうした子どもたちに、読むことの楽しさを知らせ、読む意欲をもたせていくのが、文学の授業でなくてはならない。意欲は、感動を抜きにしてうまれるものではない。文学の読みにおける感動は、自らをひら

いた個々が高まりあっていく中で生まれる。それは、一読総合法において可能なのである。

一読総合法が学習過程の中で「ひとり読み」の時間を大事にしているのは、まずもって子どもと文学作品との直接的な触れ合いを可能にし、自由な心で、好きな角度から作品に切り込み、自分なりの感銘や印象を持つ場を保障するためである。ここで、自分一人の感動を味わうこともできるし、疑問や話し合いたい問題をみんなの中に出していく準備もできるわけだ。

一読総合法は、自分の感性や経験や知識のすべてを動員して言葉に向き合っていく読みであるが、その前提として教師と子どもの関係、子どもと子どもの関係が、心を開いて自由にものを言える状態にあることが、授業成立の条件である。そうした信頼関係があつてこそ、強制でない自由な読み取りが生まれ、自発的にそれぞれの読みを深め合うことが可能になるのである。

〔立ち止まり〕

題名読み	⑨ P. 6 5 L. 5 ~ P. 6 5 L. 7
① P. 6 1 L. 1 ~ P. 6 1 L. 5	⑩ P. 6 5 L. 8 ~ P. 6 5 L. 1 0
② P. 6 1 L. 6 ~ P. 6 2 L. 2	⑪ P. 6 5 L. 1 1 ~ P. 6 7 L. 9
③ P. 6 2 L. 3 ~ P. 6 2 L. 4	⑫ P. 6 7 L. 1 0 ~ P. 6 8 L. 5
④ P. 6 2 L. 5 ~ P. 6 2 L. 1	⑬ P. 6 8 L. 6 ~ P. 6 9 L. 5
⑤ P. 6 3 L. 1 ~ P. 6 3 L. 9	⑭ P. 6 9 L. 6 ~ P. 7 0 L. 1
⑥ P. 6 3 L. 1 0 ~ P. 6 4 L. 2	⑮ P. 7 0 L. 2 ~ P. 7 0 L. 1 4
⑦ P. 6 4 L. 3 ~ P. 6 4 L. 7	⑯ P. 7 1 L. 1 ~ P. 7 1 L. 3
⑧ P. 6 4 L. 8 ~ P. 6 5 L. 4	⑰ P. 7 1 L. 4 ~ P. 7 1 L. 9

4. 授業の記録

(1) 長者さまに言いたい 立ち止まり⑩から

この場面では、長者への怒りが爆発した。「わるい」「ずるい」「けち」という非難の言葉が並ぶ中で、郁代さんの書き込みは、ちょっと光を放っていた。「長者さまはどうしてこめ一つぶもわけてやらなかったのかな。ちょっとつめたすぎる、この長者さま。私だったらわけてやるのにな。」人間関係には難しい問題があるのだけど、この短い文の中に彼女本来のやさしさを見る思いがする。結構長者の本質に迫る書き込みが多かったのだが、中でも権力者の本質を見事に指摘したのが紫乃さんだった。彼女は、立ち止まり⑧での長者の発言と関係付けてこう書いた。「長者さまは、太郎がいたらなにされるかわからないし、くらのみはりをしている人がやられてみんなにあげたらいやだからおいだしたと思うから、ずるい。」鋭い読みは深い読みを呼ぶ。付け加えてと立ち上がった子どもがいる。「⑧で長者が、『みなで米つぶ出しおおて……』と言っているけど、みなの中に長者

は入っていないと思う。」

(2) 「倉を打ちこわそう」 立ち止まり⑫から

※読みのねらい

- ・ そうだんぶって倉を打ちこわしい行く村人の様子を読み取り、村人の行動についての感想や意見を言う。

※展開

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
<ol style="list-style-type: none"> 1 前時の表現読みをする 前時までの内容を短く話しかえる 2 立ち止まり⑫の書き込みをする 3 書き込みを発表し、話し合いの柱立てをする <ol style="list-style-type: none"> 1 指名読み 2 書き込んだことを出し合う 3 みんなで話し合うことを柱立てする 4 柱立てをもとに話し合う (予想される柱) <ol style="list-style-type: none"> 1 村人の相談と打ち壊しに向かう様子 2 村人の行動について 5 本時の部分を表現読みする 6 話の続きを予想する 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 村人の様子と長者の姿を中心に。 ・ 書き込みの進みにくい子どもには、本時のねらいに添って助言する。 ・ 子ども自身ではまだ柱立てができていないので、書き込みの発表をもとに、教師が柱立てを行う。 ・ 相談の様子をくわしく話しかえることによって、村人のぎりぎりの選択であることをつかませたい。 ・ 道徳的善悪論に陥らないように、今までの長者との関係を思い起こしながら感想や意見を言うようにする。

村人たちが打ちこわしを決意する場面をくわしく話しかえた。原作ではわずかに二つの会話で終わっている相談が、実は死ぬか生きるかの瀬戸際でのぎりぎりの選択であったことが明らかになってきた。そんな中で、「米をうばいかえそう」という篤史君の発想や、打ちこわしには「年よりや子どもはおいていこう」とい

う紫乃さんのやさしさが光っていた。

打ちこわしの評価についても、それまで子どもたちの中にあった「ぬすみ＝悪」という公式では済まされない葛藤が生まれ、打ちこわしは仕方無かったし、長者こそが悪かったのだと考える子どもが多くなった。

「はらがひついて死にそうじゃ。」「ややこをたすけとうせ。」「おかゆでもええきに。」村人がこんなにたのんでいるのにわけてやらない長者はわるいと思う。ぬすむことはたしかにわるいけど、そのときの様子ではそうするよりなかつたろう。長者さえ米をわけてやれば、村人は米をぬすみに行かなかつたはずだ。もしも米があるのにぬすみに行ったのなら、わたしはわるいと言つたけど、その時はしかたがなかつた。だから村人がしたことはゆるしてもいいことだと思つた。いくら長者の土地でも、村人が食べる分はもらえたはずだ。それなのにひえ一つぶもくれないのはおかしい。やっぱり長者がわるい。
(雅子)

5. 授業について ——読み切れなかつたラストシーン——

立ち止まり⑮から⑰、あとがきにあたる「しばてんとぼく」というこの作品のテーマに迫るシーンをぼくらは読み切れなかつた。

人間の思考というのは、自らの経験を価値判断の物差しとして行われる。その「経験」という時、それは実際の生活の中での直接的な経験と読書などを通じた間接的な経験とがあると思う。そしてぼくは、教育の営みが子どもの中にこうした価値基準を形作っていくことに、大きな意義を感じている。今回、「しばてん」を教材に選んだのもその辺の理由からである。

ところが、授業は結果として失敗に終わった。子どもの実情からして若干教材が難しすぎたのかもしれない。考え合うこと、議論することが苦手だという弱さがラストシーンに出た。ぼくらの学級がこの作品を読み切れるほどに高まっていなかつたのだとも思う。それは、日頃の生活の中で、なかまの心を思いやつた付き合いをしていないという、学級の質の現れでもある。「くやしいけれど、それがぼくらの現実だ。なあ、みんな。いつの日か、きつこの場面に帰つて話し合おう。その時ぼくらのクラスは前に進むのだ。読み切れなかつたくやしさと課題を持ち続けて生きよう。」そう総括をして一応授業は終わった。

II. 劇「しばてん」

1. 劇をつくろう ——シナリオ大募集——

4月に学級の年間計画を立てた時、映画づくりか劇をしたいという声が上がつ

ていた。その時点では具体的な計画はなかったのだが、授業が終わる頃からもう一度『しばてん』で勝負してみたいという思いが膨らんできていた。子どもたちに相談したらやってみようということになって11月中旬からシナリオづくりに取りかかった。まず、場面の設定をして、場面ごとにシナリオを募集した。書き込みや授業記録をもとにして書かれてくる子どもたちのシナリオは、その子の人柄が滲み出ているものが多く、興味深かった。わずかに補足した箇所はあるものの、ほぼ子どもたちの原稿を編集することでシナリオは出来ていった。

2. 再びラストシーンへ

シナリオづくりは、ラストシーンの手前で止まってしまった。読めていないのだから当然のことである。第七幕（ラストシーンの前）までのシナリオの読み合わせをしている間に、子どもたちのラストシーンに対する思いが変わってきた。つまり、役人に引き立てられていく太郎を見送る村人の思いを自分の方に引き寄せられてきたのだろう。そこで、さねとうあきらの『首なしほていどん』の読み聞かせをした。二つの作品には共通点が多いだけでなく、子どもたちが読み切れなかったテーマに迫る村人の心象風景が一層細やかに描出されている。それを受けて、再度ラストシーンの授業に挑んだ。シナリオを作り始めてから1か月、12月10日のことだった。

「秋祭りがくるたびに、村びとたちは、いなくなった太郎のことを思いだす。自分たちの心にいつからか住んでいるしばてんのことをおもいながら。」このラストシーンで、村人たちが思い出す太郎の事というのは、役人に売り渡した時のことだという点では一致できるようになった。しかし、そこでの村人の呟きとなると、ひたすら懺悔する子、仕方がなかったと居直る子など、さまざまだった。もとより、さまざまあっていいのだが、太郎の思いに迫るものや、どうすればよかったのだろうか考えるものが出てきたのは収穫だった。「あの日にわしらは太郎にあんなことをしてしまった。その時わしは、太郎の気持ちを考えなかった。太郎はなにも言わなかったけれど、太郎はさげびたいほどかなしかったにちがいない。」と書いた真希さんは、女の子の間のいざこざがあっても、どうしたらいいかわからないと言いながらも決して郁代さんから離れていくことのない子だった。

太郎の心を考えたうえで、それでは役人が来た時村人はどうすればよかったのかということを考え合った。そして、最終的に第八幕のシナリオは、村人役と村の女役の子らが書いた呟きをほぼそのまま使った。

村人②「おら、しばてんがやりましたと言うしかなかっただ。あいつは捨て子だから、村にひがいを与えないし、谷底へ落としても死なないくらいだから、うち首になっても帰ってくると思うがのう。おらも死ぬのはいやじゃった。」(和也君)

村の女③「太郎にはほんとにすまないことをした。わたしらは、太郎をうら切った。あの時のわたしらは、太郎の気持ちを考えなかったのよ。あの太郎の悲しそうな目が、心にやきついてはなれやしない。太郎は、なにも言わなかったけど、心の中はさげびたいほど悲しかったにちがいないわ。」(真希さん)

村の女④「わたしら、太郎を自分らの都合のええようにばかりしとったなあ。でも、太郎はもんく一つ言わずに、わたしらを助けてくれた。長者さまの倉を打ちこわしに行った時も、役人が来た時も……。役人が来た時、長者さまがどれほどひどい人だったかをきちんと言っとれば、あるいは……。役人に連れて行かれる時、きっと太郎は、わたしらのことあきらめていたんだわ。だから、『この村の人たち、みんなが米を食べたんだ。』とは、言わなかったのねえ。」(雅子さん)

3. シナリオ —心の中はさげびたいほど悲しかったにちがいないわ—

0幕 (紙芝居をスライドに撮ったもの)

絵(1) P. 61L.1 ~ P.62L.4(原作のまま)

絵(2) P.62L.5 ~ P.62L.8

絵(3) P.62L.9 ~ P.62L.13

絵(4) P.63L.1 ~ P.63L.9

絵(5) P.63L.10 ~ P.64L.2

1幕

ナレ 太郎は、村人たちに育てられ、すもうばかり強い、がき大しょうになった。ある年の秋祭り、勝ちぬき相撲の土俵へ、初めて太郎がのぼった。

子ども① 太郎兄ちゃん、がんばってや。

子ども② 絶対、太郎兄ちゃんが勝つって。

村人① (土俵上で太郎と向き合って) 子どもか。

村人② こりゃ、ちび。でべそひきぬかれんうちにおりてきい。

村人③ そうじゃそうじゃ。

村の女① あの子も気の強い子ねえ。子どもはここで見といたらいいものを。

行司 ハッケヨーイ ノコッタ

(太郎、村人①を軽々と投げ飛ばす)

村人④ おい、太郎が勝ったぞ。

村人⑤ まぐれよ。

村人③ よし、次はおれが相手だ。

行司 ハッケヨーイ ノコッタ

(太郎、村人③を投げ飛ばす)

(続いて村人④⑤⑥を投げ飛ばす)

村人② そいじゃ、最後は村一番のおれさまが相手じゃ。

行司 ハッケヨーイ ノコッタ

(太郎、村人②も簡単に投げ飛ばす)

子ども① ヤッター、太郎兄ちゃんの優勝だ。

子ども③ 弟子にしてほしいなあ。

村の女② 育ててもらった恩のある衆らを、何もあんなに投げ飛ばさなくともええに。

村の女③ ほんに。(子どもに) あんな子と友だちになってはいけないよ。何をされるかわかったもんじゃない。

村の女④ そうだよ。もう遊んだりしちゃいけないよ。

長者さま こんな強いやつがいてはこまったことじゃ。

2幕

(村人たち集まってきて世間話)

村人⑦ きのう、太郎のヤツとすもうとった衆らな、みんな足腰が立たんで、ねこんでるそうやで。

村人⑧ 野良仕事もできんし、とんださいなんじゃ。

年寄り① やっぱり、太郎のヤツは、しばてんの生まれかわりかもしれんろう。
(声をひそめて)

村人⑨ 太郎は、しばてんの生まれかわりじゃ。

村人⑩ そうじゃ、そうじゃ。

年寄り② そんなに決めつけて言うもんじゃな 行って。太郎がかわいそうじゃで。

村の女④ おばあさんはそんなのん気に言うけど、太郎はしばてんに違いないわ。
(声を強めて)

村の女⑤ きっと、そうやわ。(大きな声で)

長者さま (いつの間にか話の輪に入ってきて) みなで米つぶ出しおおて、育ててきたけど、こんなきみ悪いばけものは、村にやおけん。(ゆっくりと、きっぱりと)

村人⑨ そうじゃ、あんなやつは村にはおけん。

村人⑧ しばてんを村から追い出せー。

(村人たち、手に手にぼうきれや石 をもってさわぎ出す)

村人⑦ しばてんめ、村から出て行け。

村人⑩ 二度と村に来るな。

太郎 おらは、しばてんじゃない。太郎だよ。

村人⑨ うるせえ。しばてんのぶんざいで。
太郎 おらが何をしたと言うんだよ。どうして追い出されなきゃならないんだよ。
子ども④ このやろう。(と、石を投げる)
太郎 いたい。いたい。やめてくれー。
村人⑧ えぼし山へ追い上げろー。
太郎 ひどいよ。こんなの人間のすることじゃないよ。
村人⑩ 何をぬかすか。もともとすて子のくせに。
太郎 助けてくれー。おらは太郎だよー。(太郎はとうとうえぼし山へ追い上げられる。)

3幕

(幕が開く前に)
ナレ 月日はながれた。
太郎は、木の実、草の根をかじってそれでもなんとか生きていた。けれどもあるとき、人間に会いたくなかった。その年は、日でりつづきだった。太郎が、こっそりと山からおりてきてみると、田んぼはかれ、村には食べ物がなかった。
子ども② (舞台のそでで) あっ、草や。
(子どもが5人、草をめがけて走り寄る)
子ども② この草は、おらが見つけたものやぞウ。
子ども① 何を言うとするんじゃ。強いもんがえものにありつけるんじゃ。(子ども②をおしのける)
子ども② よこどりはずるいやないか。(子ども①をおしかえす)
子ども① ずるいも何もあるもんか。この世はな、強いものだけが生きのびるんじゃ。わかったか。このアホ。(子ども②をなぐりとばす)
子ども③ 私らにもわけてよ。
子ども④ そうや。みんなおなかすかして死にそうや。ひとりじめはずるいわ。
(二人、子ども①にくってかかる)
子ども① そんなにほしけりゃ、とってみろって。(と言いながら、草をふりかざして逃げる。②③④はあとを追う)
子ども⑤ (ひとりよりのこされる)
わたしも、食べたい。(力なく言って、とぼとぼとついていく)
ナレ ところがどうだ。長者さまのやしきをのぞいてみれば……。
(舞台の左前)

長者屋敷の女① ご主人さま、さあ、どうぞお一つ。(と言いながら、盃に酒をつぐ)

長者さま オットットット。ウーン、うまいのう。またこのたいの身は、とびきり酒に合うのう。

うん、どうじゃおまえも。(と、妻に盃をさし出す)

長者の妻 そうね。じゃ一杯だけいただこうかしら。

長者屋敷の女② じゃ、私がおつぎしますわ。(酒をつぐ)

長者の妻 あー、おいしい。体のしんまであたたまってきそう。このじゃがいものふかしたのも、とってもいい味なこと。

長者の妻 さあ、お前たちもご飯になさい。

長者屋敷の女① ご主人さま、村じゃ日でりつづきで食べ物がなく、木の実、草の根をうばいあつてるというのに、私たちはこうして毎日白いごはんをいただけて、しあわせですわ。

長者屋敷の女② 本当にそうでございますわ。みんなご主人さまのおかげだと、毎日手を合わせておりますの。

長者さま そうか、そうか。まあ、どんなに日でりがつづこうと、おまえたちが食べるぐらいはしれたものよ。えんりよせずに食べるがよいぞ。ワッハッハッハッ。

※舞台上の劇にもどる

(村人たち、長者屋敷の近くによつてくる)

子ども⑤ おなかすいたよう。

子ども② 腹がひついて、死にそうじゃ。

子ども③④長者さまー、ごはんをくだせー。

村の女③ どうか子どもらに食べるものをめぐんでくだせー。

村の女① ややこを助けとうせ。おちちが出んきに。

村の女② ややこだけでもおたのもうします。

年寄り① おかゆでもええきに。

年寄り③ おかゆのしるだけでもええきに。

子ども① アーア、おれの頭ほどもあるおにぎりにかぶりついてみたいのう。

ナレ ところがどうだ。

(舞台の左前)

長者の番人① ご主人さま、屋敷のまわりに村のヤツらが一杯集まって来ております。

長者の番人② 腹がへった、死にそうじゃ、食べる もんをくれと、うるさく申しております。いかがいたしましょう。

長者さま 放っておけ、放っておけ。そのうちにあきらめて帰るじゃろうよ。

長者の番人② しかし、ご主人さま。万一、百姓ら に死なれでもしたら、年貢
がとれなくなるのでは……。

長者さま ワッハッハッハ。まあ、その時はその時よ。心配せんでも土地を持
たん百姓のかわりなど、いくらでもあるってことよ。

よいか。大事な米じゃ。あんなヤツらには米つぶ、いやひえ一つぶ
もやってはならぬぞ。

※舞台にもどって

長者の番人① おまえたちにやるものなんぞ、ひえ 一つぶもないわ。

長者の番人② さあさあ、早く帰れ、帰れ。ぐずぐずしていたら、たたきのめ
すぞ。(と、棒をふり上げる)

太郎 (物陰に隠れて様子を見ていた)

村の人らも、ひどいくらしをしていたんじやのう。(しみじみと)

4 幕

村人⑩ 今日、みんなに集まってもらったのは、他でもない。この日での
ことじゃが、もう木の実も草の根も、お よそ食べそうなもんは食い
つくしてしもた。

村人⑨ このままじゃと、年より、がきは死んでしまうぜよ。

村人⑩ まあ、最後まで聞けや。だからじゃどうしたらええもんか、みな
の考えを聞かしてもらいたいんじや。

(一同、考えこむ)

村人⑦ 村ん中で、食いもんのあるとこと言やあ、長者さまのとこだけだろ。
長者さまに頭さげてお願えするしかないと思うがな。

村人⑧ おらもおんなじだ。長者さまにお願えするしかないと思うだ。

村人⑥ でもよ。これまでも何べんもお願えに行っただねえか。なんぼ頭を
下げても、米一つぶくれなかつたでねえか。がまんなんねえ。

村人⑤ 長者さまは、本当はおらたちのことなんか何も思とらんじや。あ
んなドケチに、なんぼ頭を下げても無理じゃ。

村人⑩ 無理じゃと言うてしもうたんでは、どうしようもねえ。おらな、こ
こへ来る時のがきとかかあの顔を思うと切なくてな。がきが、なん
でもええきに食べもんをくれようって、かのなくような声でぬかし
やがるんじや。そしたら、かかあが、がまんせえ、今はどんなに言
うても食いもんはでてこん、がまんせえって、つらそうにな、がき
の頭なぜながら言いやがる。おら、つろうて、切のうて……。

村人⑨ おらもじゃ。おらのうちも一緒じゃおらはどうなってもええ。でも、
がきだけは何としても助けてやりてえんじや。(全員うつむく)

村人② よし、長者の倉をぶちこわそう。(と、決心したように立ち上がる)

村人① えっ、お前、なんちゅうおそろしいことを言うだ。長者さまの耳に入ってみろ、ただじゃすまねえぞ。

村人④ そうじゃで。おまんはちょっと血の気が多てぶっそうでいかん。

村人⑤ いや、おらは賛成じゃ。あのドケチには、それぐらいにせんとわからんのじゃ。

村人⑥ おらも行くだ。

村人③ おらもだ。

年寄り① ちょっと待て。若いもんは長者さまのこわさを知らんのじゃ。お前らのすもう自慢の力だけでは、どうしようもないんじゃよ。

村人⑧ あーあ、こんな時に太郎がいてくれたらなあ。

村人① ばか言え。あんなばけもんの力をかりられるか。それに、お前、あいつを山に追い上げた時には先頭に立ってたと言うじゃないか。

年寄り① ともかくだ。打ちこわしなどとおそろしいことは考えるな。なッ。

村人② それじゃ、じいさんはこのまもうえ死にしろと言うのかよ。

村人⑥ おら、打ちこわしに行くだ。このままじっと死ぬのを待つより、いちかばちかやってみるだ。

村人③ おらもそうする。どんなばつをうけても、うえ死にすることを思えば、何もおそろしかねえ。

村人⑨ もしもうまくいけば、がきやおばあに腹いっぱい食わしてやれるしな。みんなが行くなら、おらも一緒に行くだ。

村人⑤ おら、行くぜ。このまま死ぬのはごめんだ。

村人④ よし、おらも。

村人① おらも。

村人⑧ それじゃ、おらも行くよ。ほかにどうすることもできねえもんな。

村人⑩ それじゃ、長者さまの倉を打ちこわすことに決めるぜよ。生きて帰れんかもしれんし、うまくいっても、あとでどんなおとかめを受けるかもしれん。女、子どもには知らせずにおらたちだけで行く。ええな。

村人⑦ あのう、打ちこわし言うても、しょせんはどろぼうぜよ。おら、ぬすんだ米で腹を大きいはできん。

村人② いいや、それはちがう。長者の倉につまっている米を作ったのは、おらたち百姓だ。それを長者が年貢じゃと言うてとりあげたんじゃないか。おらたちは、おらたちの作った米を長者からうばい返すんじゃ。(と言って立ち上がり、拳を突き上げる)

村人⑩ それじゃ、行くぞ。(拳を上げる)

村人全員 オー。(と、拳を上げる)

5幕

(舞台のそで)

長者の番人① おいおい、なんだあいつらは。くわ持って固まって、こっちへ来るぞ。

長者の番人② 村のやつらだな。よし、長者さまに知らせに行ってくる。(屋敷に入っていく)

(舞台左前の長者屋敷)

長者の番人② 長者さまあ、長者さまあ。大変でございます。

長者さま なにごとじゃ。そうぞうしい。

長者の番人② 村のやつらがくわを持って、こちらへ向かってきます。いかがいたしましょう。

長者さま 何かと思えばそんなことか。なあに腹をへらした百姓どもなど、たかがしれておるわ。ちょっと痛い目にあわせて、追い返してしまえ。

(幕が開く。鍬を持った村人が力なく入ってくる)

村人① おら、もうだめじゃ。腹がへって、腹がへって、もう一步も動けん。

村人② おい、しっかりしろ。(と、声をかける)

村人⑧ おらもだめじゃ。(と、たおれる)

村人④ おらも動けん。(と、たおれる)
(つづいて、③⑤⑦⑨もたおれる)

村人⑩ みんなどうしたんじゃ、もうちょっとだというに。

村人② そうじゃ、あきらめるでねえぞ。
(番人、おそいかかってくる)

番人① やいやい、お前ら何しに来た。

番人② 生きて帰れると思うなよ。
(二人して、村人②を打ちのめし、次に⑩をあっさり片付ける。さらに倒れている村人にも襲いかかる)

村人① おらたち、これでおしまいじゃな。(ふるえながら)

村人③ ああ、そのようじゃな。
(突然、太郎がとび出してくる)

太郎 しばてんが助けに来たぜよ。(とさけんで、番人①を投げ飛ばす)

番人② しばてんが出たあ。(わめきながら屋敷へ逃げ帰る)

村人⑧ しばてんが来たぞう。(立ち上がって)

村人⑦ しばてんが助けに来てくれたぞう。

村人⑨ もう、これで安心じゃ。

(村人ら、すっかり勇気づく)
(舞台左前の長者屋敷。屋敷の女、妻はパニック状態で逃げ回る)
長者さま (表の様子をうかがいながら) エーイ、めんどうな事になったわ
い。太郎のヤツめ、まだ生きていたのか。あの時にしまつしとくん
じゃった。(とつぶやく)
長者さま (表にとび出して、逃げ回る妻らに向かって)
こわがるなちゃ。こいつは太郎じゃ(と叫んで、太郎にとびかかっ
ていく)
(太郎、長者を空のかなたへ投げとばす。女ら、泣きわめきながら
逃げていく)
村人⑤ やったあ。勝ったぞお。
村人⑥ そうじゃ、勝ったんじゃ。腹いっぱいめしが食えるんじゃ。
村人⑩ ああ、これでがきは助かる。みんな太郎のおかげじゃ。
(村人たち、互いに肩をだきあいながら喜びあう)

6幕

ナレ 長者さまの倉から運び出した米俵はみなで分け合った。
村の女④ 白い米のごはんが腹いっぱい食べられるなんて、ゆめみたいじゃ。
村の女① おかげで、お乳もよう出るようになって、ややこが喜んですいつい
て。
年寄り③ ああ、わしの病気もすっかりふっとんでしまったわ。
年寄り① それもこれも、みんな太郎のおかげよのう。
年寄り②ほんと、太郎さまさまじゃ。
村の女⑤ 盆と正月がいつぺんに来たと言うけど、それが10年分もまとめて来
たみたいね。
村の女②③ ほんとねえ。
(女、年寄りが話しながら去った後に、子どもと太郎が登場)
子ども③ 太郎にいちゃん、だっこして。
子ども④ 私もだっこして。
子ども⑤ 私が先よ。
太郎 ワー、そんな一度にはできないよ。一人ずつ順番にしてやるからね。
子ども① 太郎にいちゃん。そんなだっこよりすもうをしようよ。
太郎 すもう。ああ、久しぶりだなあ。あの秋祭り以来だなあ。よっしゃ、
やるか。
子ども② ワーイ、やったあ。
(太郎と子どもが組んでいるところへ、野良仕事へ出かける村人

らが通りかかる)

村人③ おい、太郎。ちょっとは手かげんしろよ。
村人② おまえの力にかかっちゃかなわねえからよ。
太郎 へへへ、わかってるって。
(村人ら、舞台のそでへ去る)

村人④ さあ、おらはまた働くぞー。
村人② ちょっとばかりくやしいけど、しかたねえな。(とつぶやく)
村人④ 何が。
村人② うーん、いや、いい役を太郎にとられてしまったと思ってな。
村人③ ハハハ、それは仕方ないさ。何と言ってもあの力じゃもん。
村人④ 太郎に不足など言うとしたら、バチがあたるってもんよ。

7幕

ナレ しかし、そんな豊かで楽しい日々も 長くは続かなかった。ある日のこと役人が村へ来た。

役人① 長者の倉の米俵をぬすんだやつはだれだ。(と、よばわる)
(村人らは黙ってひれふしている)

役人② 長者の米を食ったやつはだれだ。(と、どなる)
子ども⑤ う、うわあー、おかあちゃーん。こわいようー。
役人② うるさい子どもだ。泣きやまないか。
役人① さあ、だれがやったのじゃ。名のり出よ。
子ども④ あ、あの、わたし……。
役人① うむ、なんだ。
子ども④ いえ、なんにも……。
役人② さあ、ぐずぐずせずに名のり出よ。ちゃんと調べはついているんじゃない。(村人ら、震えながら下を向く)

ナレ みな、ふるえながら考えたのは、しばてんのことだ。
あいつはばけものだから、やすやすとなわをぬけられるだろう。
うちくびになっても、にいとわらって、生きかえるにちがいないと、村人たちは思った。

村人② しばてんです。
村人⑤ しばてんが全部やりました。
村人⑨ そうです。しばてんです。
村人⑥ しばてんがやりました。
村人⑦ しばてんが一人でやりました。
役人② そのしばてんという奴、出てこい。(太郎、無言のまま出てくる)

(役人ら、太郎をあらなわでしばり連れていく。太郎、無言のまま引かれていく)

(村人ら、その場にへたりこんだまま、じっと太郎が連れて行かれるのを見送る)

(幕が閉まる)

ナレ 太郎は、そのまま帰ってこなかった

8 幕

ナレ 何年もの月日が過ぎた。

(祭りばやしが聞こえてくる。幕が開く。子どもたちがワイワイと言いながら現れ、やがて去っていく)

ナレ 秋祭り。かつてそれは、収かくを祝う最もはれやかな日であった。しかし、村人たちは、あの日以来、腹の底から笑い、心の底から喜ぶということがなくなった。かつて楽しかった日であればあるほど、心のどこかにつかえているものが、むっくりと起き上がってきて顔をのぞかせるのだった。

(ナレーションの途中から、村人と村の女が舞台に出てくる。ゆっくりとした足どりで思い思いの場所に立ち、一点を見つめたまま静止する)

村人⑩ 太郎にはひどいことをしてしもうたのう。ふり返ってみれば、あの時のわしは、頭がどうかしとったのかのう。あの時、わしは、自分さえ助かったらあとはかまわんと思ったのかもなあ。みなもそう思ったのかもしれん。あの時、本当のことを言っていればよかった。太郎をえぼし山に追い上げたり、役人にうったり、悪いこととしてしもうた。本当に悪いこととしてしもうた。

村人② おら、しばてんがやりましたと言うしかなかっただ。あいつは捨て子だから、村にひがいを与えないし、谷底へ落としても死なないくらいだから、うち首になっても帰ってくると思うがのう。おらも死ぬのはいやじゃった。

村人⑨ わしゃあ、太郎の責任にしとうはなかった。でも、本当のことを言やあ村のもんみんながうち首になったんじゃ。ほんまにすまんかった。

村人⑥ 太郎ひとりとおらたち、いや、村のもんみんなと太郎ひとりじゃ、ああするしか仕方なかったんじゃ。

村人⑤ おらあ、ほんとのことを言えばよかったと思ってる。でも、太郎は身寄りがないから、死ぬのは一人ですむしな。自分が一番大事だと

ずうっと思っていただけ、命を助けてくれたヤツに罪を全部きせてしまって、おらあ、晴れ晴れとした気分にはなれねえよ。

村人⑦ 太郎はあのときどう思ってたんだろう。役人が来た時、みんなでやったと言ってたら、みんなうち首になったかもしれねえけど、長者の事を話して、食べたわけを言うんだった。それを太郎一人のせいにして、おれは二回も太郎をうらぎって、つらいめにあわせてしまった。

村人① おら、太郎の責任にたくはなかった。でも、自分が生きるには、ああするしかなかったんじゃ。役人が、いや、ぼつがあんなにきつくなければ、はっきり言えたかもしれんのじゃが。おら、ずるい人間じゃ。いいや、おら人間ではない。太郎こそが人間じゃ。

村の女③ 太郎にはほんとにすまないことをした。わたしらは太郎をうら切った。あの時のわたしらは、太郎の気持ちを考えなかったのよ。あの太郎の悲しそうな目が、心にやきついてはなれやしない。太郎は、なにも言わなかったけど、心の中はさげびたいほど悲しかったにちがいないわ。

村の女④ わたしら、太郎を自分の都合のええようにばかりしとったなあ。でも太郎はもんく一つ言わずに、わたしらを助けてくれた。長者さまの米倉を打ちこわしに行った時も、役人が来た時も……。役人が来た時、長者さまがどれほどひどい人だったかをきちんと言っとれば、あるいは……。役人に連れて行かれる時、きっと太郎は、わたしらのことあきらめていたんだわ。だから、「この村の人たち、みんなが米を食べたんだ」とは言わなかったのねえ。

(村人たち、空間を見つめたまま。祭りばやし再び始まり、やがてピークに。突然音が止まり、幕が閉まる)

4. 演じるということ

(1) 米は盗むんじゃねえ、奪い返すんじゃ ～和也君のこと～

10月に学級で“事件”が起こった。和也君を頂点として数人の男の子たちが「やくざ組」なるものを作った。その中にも上下関係があって（力の関係を反映したもの）、一番「下」の子を鍛えてやると言って「組」に入っていない子ら（「力」の弱い子らがほとんど）に「果たし状」を突きつけた。突きつけられた子どもたちは、葛藤の末にそれに応じ、屋上に続く階段のところで「決闘」になった。「決闘」は、その一番「下」の子が泣いてしまって、やや「上」の子が仕返しをしたところで、和也君の一声があって幕となった。――翌日、学級で話し合う中で見えてきたものがある。「組」は和也君が遊び仲間との冗談から作ったものだった。

た。ところがそれが冗談の域を超えそうになった時、多くの子が「組」から出たいと思ったが、和也君が「こわい」から言えなかったという。一方、「果たし状」を貰った子どもたちは、けんかの弱い子が多かったし負けるのが分かっているのだから、困ったことになったと思ったが、言うことを聞かないと何をされるか分からないから応じることにしたと言うのだ。ところが、クラスの中に、過去和也君から実際に「何か」をされたという子は、だれもいなかった。わずかに一人だけ、2年生の時にけんかをしたという子がいたが、その時は和也君が負けている。確かに彼はクラスで一番体躯が大きく、存在感もある。顎で人を使っている面も実際にある。しかし、回りの子どもたちの彼を見る目が、彼を「こわい」存在にしている側面も大きい。さらには、彼の陰に隠れて自分の行動を正当化している子どもたちの課題はもっと大きい。あるいはまた、この問題に限らず、その「前兆」として起こっていたいくつかの小さな問題を見過ごしてきた女子も含めた集団の課題も大きい。

第1幕のシナリオが出来た時点で、配役を決めた。所謂「弱い」と言われている子どもたちが長者の倉の番人や役人という村人をやっつける側の役を選んだのは、偶然ではあるまい。言うまでもなくこの劇の主役は村人たちであるが、和也君は村人②になった。村人②は、村一番相撲の強い青年である。10人の村人のせりふや行動は、彼らの日常と相当に重なっている。そんな中で特別に思いを込めて書いたのが、第4幕・「打ちこわし」の相談の場面での村人②のせりふである。相談がほぼまとまったところで村人⑦が言う。「あのう、打ちこわし言うても、しょせんはどろぼうぜよ。おら、ぬすんだ米で腹を大きいはできん。」それに対する村人②の言葉。「いいや、それはちがう。長者の倉につまっている米を作ったのは、おらたち百しょうだ。それを長者が年ぐじゃと言うてとりあげたんじゃないか。おらたちは、おらたちの作った米を、長者からうばいかえすんじゃ。」これは、米「騒動」の思想に通じ、更には解放の思想に通じる。今の彼にどれほど理解できるかは難しい問題だが、演じ切ることによって自分のものにしてくれたらと思う。

(2) ややこを助けようせ おちちがでんきに ～郁代さんのこと～

1学期の個人懇談の時だった。娘・郁代さんを連れてこられていたお母さんは、ぼくに話すと言うよりも我が娘に語り聞かせるように話し出された。「小学校に入った頃、小さい弟の世話をせんとあかんかって、学校へ行けへんかった。たまに行ったら字わからへんし、それを家で教えてもらたら、いやみ言うていじめられて……。」郁代さんは、また始まったという顔をした。ぼくには、お母さんが何を言いたくて自分の子どもころの話を始められたのかがよく分かった。同時に、その思いが娘に届き切っていないことも分かった。「学校時代のくやしさを

生きるバネにしてきた。仕事だけは誰にも負けるものかと、人の2倍も3倍も働いてきた。」このときの言葉が耳についていた。9月初め、お母さんの話を聞かせてもらいにお宅へお邪魔した。ぼくが聞きたかったからなのだが、同時にこの母親の人生をきちんと伝えることが、娘・郁代さんをシャンと生きさせることになると思った。ぼくは、郁代さんにお母さんの歩みを聞き取りするように伝えて、その日は帰った。

聞き取りの中にこういうくだりがある。「お母さんは生まれて間もない弟や妹のめんどうを見ていました。お母さんの兄弟が多くて、弟をおんぶして友だちとまりつきや、お手玉や、ゴムとびや、ペッタンとか、なわとびなどで遊びました。おばあちゃんは体がわるかったのも、おちちが出なかったのも、ごはんのおも湯をとって、さとうをいれておちちのかわりとしてのませてもらった。」

彼女は、村の女①の役を演じる。日照り続きで村に食べ物がなく、長者のところにもの請いにいった時、村の女①は言う。「ややこを助けととうせ。おちちが出んきに。」——村の女①は彼女の祖母であり、幼き日の母の姿である。おばあちゃんはなぜ体が弱かったのか。おじいちゃんになぜ決まった仕事になかったのか。おばあちゃんはなぜ皮の内職をしなければならなかったのか。……それらの結果として、おばあちゃんはお乳が出ず、お母さんは弟におも湯を飲ませ子守りをし、あまり学校へ行くことが出来なかった。彼女がこのいくつかの「なぜ」に答えを出していくこと、そして、今なお朝早くから夜遅くまで時間と戦いながら皮の仕事続ける母親の生きざまに触れることが、「お乳が出んきに」という台詞に血を通わせることになるのだと思う。彼女が村の女を演じ切った時、彼女自身が一つ前に進むのだと思う。

(3) 演じるということ

演じるということは、自分が役に近づくことであり、同時に役を自分の方に引き寄せてくることでもある。読みの中で何となく理解していた太郎の思いや村人の思いを、演じることを通して理解を超えた実感として自分のものにできたように思う。

わたしは、「しばてん」のげきをして、国語の時間に読んだ時にはぜんぜん気が付かなかったことが、わかったことがたくさんありました。8まくの所の太郎の気持ちや、3まくのうちこわしの相談のところ。うちこわしのはじめ、失敗すればうち首になるという村人の気持ちにはなっていたけど、げきをしてよくわかりました。今日のげきではとってもきんちょうして寒いのもわすれてしまいそうでした。

—劇後の感想より—

Ⅲ. 版画集「しばてん」 一彫り一彫りに我が思いを

劇の本番を間近に控えて、役をつかませたいという思いから、自分の一番気に入っている台詞或いは気になっている台詞に込める思いを書かせた。そして、劇



私らにもわけてよ 悦子

が終わってからの図工の時間、自分がその台詞を言っている場面を絵に描いて、木版画にした。子どもたちは、一彫り一彫りに台詞に込めた我が思いを刻み込んでいった。刷り上がった版画の下に台詞を書き込んで、1冊の版画集「しばてん」が出来上がった。



エーイ、めんどうな事になったわい 慎一



長老の倉の米俵をめすんだやつはたまたま 全宗

Ⅳ. 「しばてん」が残したもの

縦糸に学級集団づくり、横糸に授業実践という、一連の「しばてん」の取り組みは、版画集をもって一応終わった。9月22日に読みの授業の第1時“題名読み”をしてから、すでに5か月が過ぎていた。横糸の授業実践の総括ということになると、総括の視点が難しいのだが非常に雑な言い方をすれば、「しばてん」を契機に子どもの読みが深くなったこと、劇や版画に対してこれまでになく意欲的に取り組んだことをプラス面の総括としたい。ぼくにとっては横糸の個々の総括よりも総体としての縦糸の総括こそが重要に思えるので、学級集団づくりの視点から検証しておきたい。

ぼくの学級には、子どもたちが制定した学級憲法がある。

- ①私たちは、明るく楽しいクラスをつくります
- ②私たちは、男子と女子が力を合わせる仲のよいクラスをつくります
- ③私たちは、よく話し合います

- ④私たちは、なかまはずれや差別をゆるしません
⑤私たちは、人の気持ちを考えられる子どもになります
集団を総括する検証軸は学級憲法にある。

ぼくは、この1年間で全体的な力の関係がなくなってきたと思う。でもそれは一時的なものかもしれない。なぜなら、まだ一部分に力の関係が残っているからだ。それをぼくは6年になったら完全になくしていききたい。これは5年1組の目標だと、ぼくは思っている。

力関係が減っていくにしたがって、男子と女子が話したりする事が多くなってきたと思う。これは、学級憲法第2条が多少実行されていることになると思う。それに近ごろは第4条の「私たちは、なかまはずれや差別をゆるしません」がきっちり守れているような気がする。

でも第5条は、あまり守られていない。近ごろは1組でいじめがなくなったが、それは人の気持ちが完全にわかったわけではなく、単にいじめのをやめただけではないだろうかと思っている。ぼくは、人の気持ちを考えられるようになるには、やはりあのしばてんのラストシーンの意味と「しばてんとぼく」の所の意味を読み通さなくてはいけないと思う。(慎一君)

「道しるべ5年生」として書いた綴り方の中に、「しばてん」の劇に触れたものが多数あった。それも、単に思い出としてではなく、学級集団を見つめたものが相当あった。それらは一様に男子と女子の仲が良くなったことなどの成果を認めつつ、慎一君と同様の課題を感じている子も数人いた。確かに集団は変わってきているが、もし学級憲法にゴールがあるとすれば、ぼくらは今やっとスタートラインに並んだところだと思う。憲法の①と②ができて「なかよし」、③④⑤ができてやっと「なかま」になれるんだと思う。ぼくらはスタートラインに並ぶのに1年近く掛かったことになるが、集団をきちんと見据える子どもが育ってきたことを、一番の成果としたい。いよいよこれから勝負だ。

本稿で紹介した

2007年度 6年 「ぴいす めっせえじ」

2008年度 6年 「G I F T～ケナフを育てる～」

については、DVDがあります。ご覧になりたい方はご連絡ください。